

「希望説」「閉塞感説」対「覚悟説」の相克

— 謎解き 『セメント樽の中の手紙』 実践 — 北海高等学校 荒木美智雄

1 序 「教材論史」による主題の定置を巡って

『セメント樽の中の手紙』は、葉山嘉樹の代表作であるだけでなく、「プロレタリア文学」を象徴する文学教材として高く評価され、高校現場でも取り扱われてきた。その「教材論」からの主題把握は幾つかあり、一つ目は、増田修氏（『生徒とつくる文学の授業』創風社）の「危険極まる労働者の連帯の叫び」「労働疎外からの人間回復」という主題で、二つ目は、祖父江昭二氏（『国語科通信』第六十七号）の「与三の魂」の成長や「新女性の誕生」に着目する主題であった。さらに、最近では、田中実氏（『読みのアナキーを超えて』右文書院）の「語り手」論から再考察する主題も脚光を浴びている^{〔註〕}。が、ここでもう一つ「愛」を語る珠玉の短編^{〔註〕}という主題の問題提起を行ったのが、小野牧夫氏（『国語・文学教育の研究』秀英出版）である。これを私は支持したい。プロレタリア文学では「労働疎外」が主題であることは誰も否定しない。しかし、それに矮小化せずに、多面的な作品把握のために、言語教育を基礎基本としつつ、形象を最重視し「作品の

総合化」を重層的に模索した小野氏の「愛情」論は、極めて示唆に富む。小林多喜二も「女主人公の態度で、立派に自然主義文学から抜き出ている」（日記）と『セメント樽の中の手紙』を称賛する。高校では『羅生門』、『山月記』等文学の授業を展開するが、生徒に最も衝撃を与え、その脳裏に刻まれたのが本作品である。どんな

「物語」が紡がれ、何が生徒の心を捉えるのか。その解明こそが本旨である。最初に本実践の「目的」四点を掲げ、私の論考を展開したい。

- ① 「言語教育」の理念のもと音読を重視する新たな「読み」と、「総合化」への試み。
 - ② 微分化する諸「形象」による解析と、その絡み合いから作品に描かれた人間の本質に多面的総合的に迫る「読み」の模索。
 - ③ 手紙の機能を把握し、文体の特徴と「ね」「よ」等の助詞の巧みさと、その意味付けを把握しながら作品の主題を追求。
 - ④ 「労働疎外」の実態を把握し、人間愛、優しさ、強さを論究する新「読み」論の提示。
- 2 「描写」を形象的に把握する言語教育では、早速本作品の「形象的」な解読を行う。

第一段落（「手紙」以前の部）で特徴的なことは、「身体論」^{〔註〕}で告発される過酷な労働実態だ。（この過酷な労働の「身体論」は、一切がセメントになった労働者の「骨肉・血」と連動し、最後は、誕生する「子供の姿」身体像へ昇華される、重要な要素だ。）

また、冒頭二つの「形式段落」では、異常な読点の連続（絵画的表記。詩的独立性。新感覚派の影響大）が見られ、一文が長く、音読する場合、意図的な非「流麗さ」も演出される。さらに、八回も多用する「鼻」（身体論）で一気に肉成に過酷な労働を語る表現で、その本質に肉薄する。その象徴的な描写は、「鉄筋コンクリートのよな」「石膏細工のような」の直喩描写を照射する。また、灰色のセメントで覆われた鼻の中に、コンクリートが、与三の全動作の自由を奪う悲惨さで鼻毛を「しゃちこばらせている」造形物の如きものをも作る。この像の「鉄筋」に当たるのは何かと生徒に質問すると「鼻毛」と即答。「セメント」とこね回される「水」の役割を肉体的「鼻水」が果たしユーモアに残酷さが絡まる。この描写は、北国の厳冬期、「鼻毛の水結」

で経験済みの道内の生徒たちは、妙に納得する。

与三は、業務終了間際に木の箱を樽から発見する。帰宅する途中での、恵那山の自然描写は、自然主義文学を超越した「美」であると同時に、物語の伏線を見事に紡ぐ。「白い泡」は恵那山の「雪」を暗示し、「木曾川の水が白く泡を噛んで、吠えていた」という擬人法は、酒さえ飲めず、子の誕生で一層の生活難に見舞われようとしており、さらに発電所の完成が近づき、失業するリスクを抱え、「この世の中でも踏みつぷす気」になる与三の自棄的な気分を暗示する。その端的な表現が「ウヨウヨしてる子供」「この寒さを目がけて産まれる子供」と重なるが、これを形象的な読解で理解し、「総合化」的な鑑賞を一層深めたいと私は考えた。

また、物価についての詳細な叙述があるので、「十一時間労働」と日当について、「数学」的思考で読解した。労働時間は、恵那地方の日の入り・日の出を考慮すると「朝五時半〜夕方五時（昼休憩等が合計三〇分）」となる。日当は現在の約二五二〇円という安さだ^(註3)。

さらに、「子供」の捉え方や、「ポロ」という表記等は、「与三の魂」の変化の伏線であり、祖父江氏の「与三」成長論」の把握と重なる。

3 「手紙」論による、女工の訴えの解釈

この小説では、作者が読者を作品世界に導く三つの「不思議」と二つの「揺らぎ」が小説の骨格をなす。「不思議」は、①女工がこの手紙を不特定の相手に向けて綴った不思議、②与三

(読者)が手紙を違和感なく受容した不思議、

③手紙の中に「死」が一度も使用されない不思議だ。「揺らぎ」は、①「個人的悲劇」と「労働者全体の運命」の二項対立の「揺らぎ」、②「死」と「生」という「揺らぎ」だ。作品には、これらが並行して内在する。これについては「手紙」論^(註4)からの説明が、効果的であろう。「女工」から与三(読者)の手に渡る「謎の手紙」は、作品の主旋律そのものだ。手紙という手段は、「不思議」の決定的な要因であると同時に、①情報の精度の高さ、②非公開性、③保存性という機能を担保する。「他の人には言わないが、あなただけには伝える」という「非公開」の精度の高い隠蔽は、発信者との距離を縮める。そして、手紙の後半では「あの人(恋人)」と「あなた(与三)」の連続が、我々《読者》を「与三」と化し、三位一体の「舞台装置」が構築されている。この「手紙」論は、重要かつ、斬新な問題提起であり、謎解明の大きな鍵となると私は推察する。

4 「手紙」の中の表現上の謎とその解明

- 「手紙」を読むと、「謎」が五点提起される。
- ① 「立派にセメントになりました」の謎
 - ② セメントの使用場所の「前言撤回」の謎
 - ③ 「私の恋人」から「あの人」への転換の謎
 - ④ 末尾の「わ」「ね」「よ」の謎
 - ⑤ 「ポロ」から「切れ(裂)」への転換の謎だ。順に論究したい。

① 「立派にセメントになりました」

これについては、表現を総合的に解析する必要がある。それは、「立派な(連体形)」にあらず、「立派に(連用形)」と明確な意図で表現される。前者の、「優れた」「最高の」という意の、連体修飾ではない。この意で理解すると、「皮肉・逆説」に矮小化され、読み間違え。この「立派に」は、「皮肉」以上の、セメントの完成型に完全無欠になりきったということの「事実確認」(「なりました」という動詞にかかる連用修飾)の働きをしている。この伏線上に、後述の「前言撤回」で「それ相当な働き」をする恋人の存在が大きくクロージアアップされる。

「はげしい音に呪いの声を叫びながら」の「音」「声」は「恋人が粉砕筒に入り細かく砕かれ骨肉がセメントと化す一瞬の声、爆発音」であると同時に、「女工の内面で響いた、会社の(利潤第一主義)への恨みの声」でもある。したがって、「立派にセメントになりました」には、「恋人」を救わない会社、立派な製品を完成させるという皮肉「人より利潤を重んじる会社への憤り」、そしてそれ以上に「死んでもなお会社のために役立つ立派で誠実な恋人の、人間的な完成を思う」という錯綜した心情が込められていると私たちは把握した。また、「忍びない」という叙情世界を超越した、近代社会での女工の精神的「自立」の表現とも十分取れるであろう。

② セメントの使用場所の「前言撤回」

恋人の体が含まれたセメントが、貴婦人が鑑

賞する劇場の廊下で下足にまみれたり、大資本家の財産を守る「防壁」となり労働者のデモ隊を防御する役割をさせられたりする等のことを、女工は心情的に完全に拒否する。しかしそれを「いいえ、ようございませう、どんな所にでも使ってください」と打ち消している。ここには、恋人に対して「気性のしつかりした人」「相当な働き」という賞賛と愛の言葉を贈るためという明確な意図がある。

③ 「私の恋人」から「あの人」への転換
これは、どう理解すべきであろうか。

従来の理解では「手紙の機能による、特定者への呼びかけ」「セメントである物体（恋人）による純化機能としてのエロス（恋人からの抱擁）の記憶の刻印（魅り説）」と解されてきたが、私は、別の観点から、この転換には次の三つの意味があると考えたい。

① 遠い位置：〈私の恋人〉という存在の具象が消滅し、遠い実在となったという意味
② 過去と現在：恋人の悲惨な事故による死という過去が、手紙という現在により、明確化されるという意味

③ 関係性：具体的な生身の人間が死んであのに逝った象徴性の確立という意味
だ。明確さを欠きつつ、いやむしろ不明確な連体詞「あの」であるがゆえに「多元性」を發揮する、効果的な表現方法ではないだろうか。

④ 末尾の「わ」「ね」「よ」
女性特有の言葉、終助詞「わ」を効果的に使

用し、表現を和らげている。また、「ね」「よ」も混在し、女工の最後の願いを読者に的確に伝える文末になっている。「これは『女学生ことば』であり、手紙の投稿文化や文通文化の典型である」という榎沢健氏の指摘^{註5}は、鋭い。

また、榎沢氏が「作品と投稿文化との共通点は、『繰り返し返事を要求』『女性の手紙の定型を逸脱』『自己の身上を訴え、悲劇のヒロインとしての性格を強調』等の点だ」というのも、同様に鋭い指摘だ。一方、榎沢氏の『女工哀史』等の関連で考察すれば、『女工』は『半人前の子どもだ』という類推は、可能だが、葉山嘉樹がプロレタリア文学で「女工」という名称を選定した理由も検討すべき課題であろう。この手紙の「愛を語る手紙」という性格、また「文学を文学として読む」という原則的な視点から、女工は恋人を失った二十歳前半の工場労働者の「女性」であると私は捉えたい。

⑤ 「ボロ」から「切れ（裂）」への転換

教科書では「切れ」と表記されることが多いが、クラッシュヤーで破壊された衣類の形象から「裂」を支持したい。「切れ」では、普通の布切れのイメージだが、「裂」になると、骨肉がセメント化した恋人の、「粉碎」される過程が前影化され、強烈な衝撃を与える。手紙の冒頭では「ボロ」とあえて表記し、その形状をリアルに伝えるだけだが、労働の過酷さを物質的に示す、「石の粉」「汗」にまみれた「裂」は、女工と恋人を結ぶ「愛情」を物語る。また、散在する「肉体

の断片を繋ぎ、再び源に還流させる働きをなす。

こんな「汚い布」は、恋人にしか価値はないが、なぜ、不特定の読者（手紙の受け手）に託すのか、疑問が生じる。この問題について、生徒は「戒め」「同じ労働者への理解」「愛の結晶を示すことで共感を促す」「手紙への返事を促す」「お守り」等、多様な読み取りを行った。この問題について私は、「作中では『あの人』は西へも東へも、遠くにも近くにも葬られている」と言われ、様々な建造物が『墓標』という機能を持つ。それと同様に、『裂』は、女工が恋人を一生胸に刻み、自分たち労働者と同じ世界に住む者と捉える『証』である」と読み解いた。これは「（労働者の）連帯論」ではなく、エロス以上の「人類愛」を志向するものと「深読み」をしたが、批判を請いたい。

5 「七人目の子供を見た」の解析

最後は、場面を変え、与三の自宅での描写である。あらゆる研究会でも、また教室内でも、「七人目の子供」に対する「希望説」と「閉塞感説」で激論が交わされた。どの説を取るかが主題に直結するが、多様な読みを意図的に誘発するこの重要部分について、ここで再検証する。手紙の前の部分同様に、読点が「強調」の役割を果たし、「作者の視点」「語り」を焦点化する。「松戸与三は、「湧きかえるような」で、行動主体、与三の姿を映像化し、「子供」を未来に託す希望を表現していることに注目すべきだ。経済的事情から酒など飲めないはずの与三の

手には、なぜか酒があり、「へべれけ」「ぶち壊し」とアナキー的表現が用いられるが、結局この行為主体を否定する不可能的願望の「ぶち壊してみてえなあ」は、作者の「語り」そのものである。すかさず「細君」（かかあ）は、「子供たちをどうします」と現実世界に引き戻す。そして、帰結は「七人目の子供を見た」である。他動詞の「見た」は、「生を」見たのであり、生まれることの確認と肯定であるゆえに、私も、必然的に「希望説」を取る。

ここで、私の前任校、北海道長沼高校での実践（二〇一四年五月）で生徒が書いた「希望説」からの意見文を紹介しよう。

作者の葉山嘉樹は何を思っ
て本文の最後に与三は「七人目の子供を見た」と記したのだろうか。「希望」、あるいは「閉塞感」か。彼の過酷な労働と貧困をみれば、なるほど「希望」に集約される作品。松戸家の生活は、新たな「七人目の子供」がその極貧の家計をますます圧迫するのは明らかだ。それだけでなく、「七人目の子供」が無事に成長し、社会に出たとしても果たしてそこは幸せな世界だろうか。父同様に極貧生活に喘ぎ、女工の恋人の如く惨殺される世界ではないと言い切れない現実。しかし、それでも作者が「七人目の子供」に託したのは、「希望」だと信じたい。理由は二点だ。一つ目は、父親としての新たな「命」への期待だ。与三の父としての思いをくめば、先程の「絶望の中でも」次世代を担う子供が

世界を変えるかもしれないという希望を、全ての源泉である「命」にかけた表現だと信じたい。二つ目は、「決意」である。本文の「ウヨウヨ湧きかえる」「かかあ細君」への変化は、紛れもなく与三の父としての意識変化であり、大黒柱としての意識の変化を示している。その変化とは、子供たちを、妻を、守り幸せにするのだという「決意」の芽生えであろう。その「決意」が行動として表現されたのが、最後の一文だ。受動的、自虐的な現実逃避のそれではない。自分が父として、労働者として能動的な使命のもと閉塞感あふれる現実を、「変えなければならぬ」という「決意」と私は捉えたい。（生徒W. H.）

一方、こうした希望説とは異なり、田中実氏は、「女工の張りつめた文体の中に彼女の愛と連帯の訴えが託されているにもかかわらず、いや逆にだからこそ、その愛と連帯の訴えによって、職場と家との二重の閉塞状況にある与三がいつそう自身を解体させていく」、「虚無的な自己崩壊」と重層的に読み取っている。授業でも、希望説に納得しない生徒たちも少なからずいた。

6 結 「希望説」「閉塞感説」に対する第三の説

「希望説」と「閉塞感説」は対立し、主題理解の問題を含めて、私たちに「解」を強く求める。そんな中、〈ある読み〉が、全国研究大会^{〔註6〕}で発表され、激震が走った。それは、子を持ち定時制高校に通う「ある生徒」の切実たる意見であった。彼は語る。

——「子供を見た」は、子供の命に全責任を負うオヤジの覚悟だよ。——

逃げられず壊せない、覚悟がなければ生きて行けない世界。その覚悟は、「いい悪い」の範疇を超えた、「現実の先にある厳しさ」全てを飲みこんで生きる労働者の切実な「覚悟」だ、という提起（「覚悟説」）を受け、感動した。「希望」「閉塞」とは違った、「覚悟」に焦点を当てる第三の「読み」から、国語教育は無限の可能性を秘め、絶えず「更新」する「読み」を目指すべきだと、私は、改めて痛感させられた。

〔註1〕角谷有一「作品の深みでメッセージを受けとる」

〔月刊国語教育二〇〇〇年五月号、東京法令出版〕

〔註2〕高橋博史「セメント樽の中の手紙」〔新しい作品論〕へ、〈新しい教材論〕へ〕右文書院〕

〔註3〕『値段の明治・大正・昭和風俗史』（週刊朝日編）によると、大正十五年、米十kgが三円二〇銭であった。現在は十kgで約四二五〇円とし、与三の日当を現在の金額に換算した。

〔註4〕加藤邦彦「届けられた手紙 送られる返信」（梅光学院大学論集）第四十五号、梅光学院大学。手紙が不特定の相手に書かれ、また、それでも受容されたのは、手紙の「精度の高さ」、私信の「匿名性」からであり、「死」という語の回避は、恋人の死を受容したくない心情からである。

〔註5〕棚沢健「プロレタリアのお化け」（『国文学研究』第一二六集、早稲田大学国文学会）

〔註6〕『教育研究全国集会』（二〇一四年八月一七日、高松市）